

〈特集：小児の生活習慣病〉

## 序文：小児の生活習慣病の特集にあたって

日高 宏哉

### Topic of lifestyle-related diseases in school children

Hiroya Hidaka

世界保健機関（WHO）が発表した「2011年度版世界保健統計」では、日本人の平均寿命は男女平均が83歳と、WHO加盟193カ国の中で第1位であった。その日本人の長寿の秘訣は食卓にあると考えられているのか、またはヘルシー志向の高まりからか、欧米では日本食への注目が高まっている。

しかしながら、厚生労働省発表の「国民健康・栄養調査の概要」では、我が国で糖尿病が強く疑われる人と可能性が否定できない人の合計が約2,210万人（2008年現在）と推定されており、5年前の約1,620万人に比べて約600万人の増加が報告されている。また、脂質異常症は約4000万人、メタボリックシンドローム（予備群を含む）は約2,000万人、高尿酸血症は男性の20%以上と推定されている。

これらの疾患群は、かつては「成人病」と呼ばれていたように、働き盛りの成人において罹る疾病群であり、その成因の約6割が生活習慣によるものとされている。しかし、高度経済成長を経験した我が国では、今や飽食、過食の時代を迎え、日常の高カロリーな食事や間食など、成人だけではなくその家族である子どもたちも食生活を含む生活習慣の乱れに巻き込まれている。

このように、成人病が食習慣、運動習慣、休養などの生活習慣の乱れから引き起こされることから、1996年に当時の厚生省は「生活習慣病」

という概念を取り入れ、その予防策がいろいろと講じられてきた。特に、生活習慣病の中で最も問題になるのは、動脈硬化が早い時期に促進してしまうことで、冠動脈疾患をはじめとする虚血性心疾患は発症、進展するという観点から、近年はその予防戦略として小児期からの生活習慣の改善が強調されている。さらに最近では、生活習慣病は胎児期にその素因が作られるという成人病胎児期発症説が唱えられはじめ、胎児期に低栄養にさらされ低体重で生まれると、成人になってから肥満や糖尿病や高血圧、虚血性冠動脈疾患などの生活習慣病の発症のリスクが高くなるという。生活習慣病の予防は、もはや成人一人一人の問題ではなく、家族のライフスタイルの変化を取り巻く問題となっている。

今回の特集では、小児生活習慣病の早期診断と心血管系合併症の発症予防に関する研究、特に小児の脂質異常症の病態解析とその治療法についての第一人者である太田孝男先生（琉球大学）と、循環器疾患の基礎研究および診療に携わられている中で、若年性虚血性心疾患患者の発症危険要因として小児期肥満があり、疾患予防のための効果的な学校健診の確立と親子での生活習慣病予防外来を開始された本郷 実先生（信州大学）に執筆を御願ひした。小児の生活習慣病の現状と問題点を明らかにする観点から、今後の生活習慣病予防の展望が開かれるものと期待される。

信州大学医学部保健学科 検査技術科学専攻  
〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

Division of Medical Technology, School of Health Sciences, Shinshu University School of Medicine, 3-1-1 Asahi, Matsumoto, Nagano 390-8621, Japan